

## 黒門町の師匠

古今亭志ん生と当時の最頂を二分する人気であり、戦後最大の名人ともいわれる八代目桂文楽は、登場すると客席から「クロモンチョー」と声がかかりました。東京は上野、黒門町に住まいがあったため「黒門町の師匠」と呼ばれていたからです。ところが東京オリンピックを2年後に控え、昭和37年から始まった住居表示変更によって、上野黒門町は台東区上野一丁目になってしまいました。だからといって、文楽師匠が出囃子にのって高座にあがったときに、「タイトウクウエノイチョウメー」なんて声を掛けるとさまになりません。なんと野暮な話ではありませんか。

「住居表示に関する法律」が施行されて以来、古い町の名前が全国で次々と消えていきました。最近では平成の大合併ということでさらに多くの地名が消えたうえ、妥協の産物としてか不思議な市名もうまれました。平成17年に愛知県知多半島の沖に、セントラルエアポートを略した「セントレア」という愛称の「中部国際空港」ができました。半島先端の二つの町が合併協議会を立上げ、新市名をセントレアの南にあたる、という意味で「南セントレア」と提案したところ、この名称への両町民の反撥が強く、合併そのものが破綻してしまいました。南北海道、南九州、南太平洋など、「南〇〇」というのは〇〇の範囲内であってその南部に位置することをいいます。新しい市がセントレア内の南寄りにあるのなら南セントレアでもよいが、そうではない。もし日本語の用法として「南セントレア」のような言い方が許されるなら、北方四島は「東北海道」と言ってもよいことになります。

元来、地名に「市」をつけたのが市名であって、金沢に市がついて金沢市となります。札幌然り、旭川も然り。ところが現在では「北斗市」のように、市名は必ずしも地名ではありません。平成15年4月に南アルプス山麓に位置する4町2村は、合併して「南アルプス市」となりました。「夏休みに金沢へ遊びに行く」といえば夏休みに金沢に行くことを意味するのですが、「夏休みに南アルプスへ行く」と言えば山に登る意になります。「南アルプスにいる叔父さん」と言ったら、叔父さんは山小屋の番人でもしているみたいです。南アルプスとそれに「市」がついたのとは指すところがちがうのです（高島俊男、『お言葉ですが⑩』、文芸春秋）。

最近になって、消滅した古い地名を復活させようという試みが各地で始まっています。先駆けとなったのは金沢市で、大阪冬の陣で活躍した藩士の名をとった「主計（かずえ）町」を平成11年に復活させました。仙台市でも、美しい響きをもった昔の町名がなくなってしまったことにさみしい思いをして、「歴史的町名復活検討委員会」が開かれ、肴町や材木町などという、伊達正宗の時代にまでさかのぼった町名の復活が検討されているそうです。このような動きは大分県豊後高田市や長崎市でもみられ、長崎市では長崎くんちの祭事に参加する単位の町名を復活させる見通しです。

あまりにも個性のない名前が多い。「市街地の地名をみんな『中央』と名付けてしまった都市でも、遅すぎることはない。カネとヒマはかかるだろうが、自らの大切な拠り所である地名を取り戻そう」と今尾恵介氏は主張します（『住所と地名の大研究』、新潮選書）。長い歴史を経て出来上がったものを、壊すのはいとも簡単ですが元に戻すのは容易なことではないということですね。